

巻頭言

神はどこに居られるのか

立教大学チャプレン 中川 英樹



キリスト教とは、およそ 2000 年前、ユダヤ・パレスチナの地に生き、人びとの抱える心・身体的な痛みや哀しみ、困難と苦しみに、生涯を通して寄り添い、後に、キリスト（救い主、メシア）と呼ばれることになるイエスの、その「生き方」に共感し、集められた人びとの群れのことを云います。

紀元前 63 年に、ローマの将軍ポンペイウスがエルサレムを占領して以来、ユダヤ・パレスチナの地はローマ帝国の属国になりました。ローマ帝国は、ユダヤ人たちの宗教的自由を認めつつも、ローマ帝国民としての納税義務を容赦なく課しました。またユダヤ教は、同胞のユダヤ人たちに対して、ユダヤ教徒として礼拝と 613 に及ぶ戒律（248 の義務と 365 の禁止）の厳格な遵守を強要していたと伝えられています。ユダヤ教は、それらの戒律を遵守することによって、神の救いに与れる、と教示し、違反者を細かく監視しました。それゆえ、貧しさ、病気、しょうがい、過去の犯罪、職業、出自等のゆえに、戒律を遵守できなかった者たちは「罪人」と呼ばれ、彼らは「神の救いの及ばない者」として忌避され、人びとのコミュニティの外に放逐されていきました。

イエスは、そうした人為的な制度とか戒律が人間存在よりも重視されていること、人びとに救いをもたらすはずの宗教そのものが人間への差別や裁きの原理になっていることを痛烈に批判し、「罪人」と呼ばれる彼らこそ、神の愛と神の恵みを「先に」受けるに相応しい人たち、と主張しました。そうした、イエスの人間理解の基調は、人間の価値とは、その「属性」によってではなく、「存在」することにこそあること、

存在そのモノが価値である、ということにあります。イエスが、その生涯を通して大切にしたもの、それは「人」という存在そのものでした。権力による抑圧と搾取の横行、律法、戒律の遵守強要と監視による疲弊の中、一体「神はどこに居られるのか」と嘆き続けた、当時のユダヤの人びとにとって、自分たちの痛みを共に生きる、イエスという存在は、まさに、神の顕現のそれであり、神が人びとの歴史的事実の中へと降下したことを証しました。神の愛がイエスを通して、人びとが触れることのできるものとなったのです。それゆえ、イエスは「キリスト（救い主、メシア）」と呼ばれるようになるのでした。

2023 年 10 月、しかし、その神の愛の顕現の地は戦火に覆われました。そして、世界は再び凄惨な戦争、殺し合いを目撃することになりました。圧倒的な武力・火力で街々は破壊され、今も、多くの人びとが多くの大切なモノを失い続けています。ガザにある、立教と信仰を一にする聖公会の病院も被害に遭い、その病院のチャペルを祈りの場としていたキリスト者たちは祈ることまでも奪われたと聞きます。今、神の愛の顕現の地は、人びとの大きな怒りに包まれています。しかし、その怒りは、銃器の引き金を引きながら襲い掛かってくる者たち、戦闘を指揮する者たち、眼下に暮らす者たちが居ることに気にも留めず空爆する者たちに対しての怒りではなく、神が失われた、神はもう居ない、としか想えない現実の中で、「神はどこに居られるのか」、そのような神の「不在」に対する怒りのように想うのです。そして、そうした、不在の神に対する人びとの怒りが、今、神自らに向けられていることの危機を憂います。

「怒りとは人生を破壊する炎です」

これは、2022年1月に没した、ベトナムの
ぜんそう 禅僧、平和運動家、世界的に知られた霊的指
 導者、ティック・ナット・ハン/Thich Nhat
 Hanhの言葉です。ベトナム戦争で、多くの
 人びとの血が流され、いのちが奪われていく
 現実
 に身を振りながら、戦火をくぐり抜け、こみ
 上げる怒りと向き合い、怒りは、怒りの対
 象である、その相手以上に、怒っている本
 人自らを傷つけることになる、と語った、
 このハンの言葉は、今のこの世界に重く
 響きます。人生とは、つながりの総和で
 す。怒りは、そのつながりを壊します。人
 と人とのつながり、神とのつながりを怒
 りは容易に壊していくのです。そうやっ
 て、神を失い、神なしに人が生きるとき、
 人はさらに残酷な暴徒となってしまうこ
 とを、ハン
 は告発しています。

「神様はどこに？」

ラビ・イツァークが少年の頃、ある人が彼
 に質問した。「神様が住んでいる場所を
 教えられたら、1グルテンのお金をあげ
 よう！」すると、少年は答えた。「神様
 が住んでいない場所を教えられたら、2
 グルテンのお金をあげよう！」ハシディ
 ズムの伝統に基づく逸話の一つです。神
 がいるところを教えてみる、という者
 に対する応えというカタチで、イツァーク
 は、神が居られない、そんな場所はこ
 の世界にはどこにも存在し得ないこと、
 神はどこにでも居られることを教え
 ています。「神はどこに居られるのか」
 …… 否、神は確かに共に居られる
 …… この小さな逸話はその真実を
 書き留めています。

「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。
 その名はインマヌエルと呼ばれる。これは、
 「神は私たちと共におられる」という意味
 である」
 (マタイによる福音書1章23節)

この天使ガブリエルの言葉は、神が確
 かに居られること、その神はわたしの傍
 らに、どんな

ときも、離れず共に居られることを力強
 く語ります。クリスマスは、神の愛の
 顕現のできごとです。神の愛の顕現は、
 いつも、人びとの哀しみと困難、絶望
 と諦め、「神はどこに居られるのか」そ
 の悲嘆と怒りに対して、逆説として示
 されてきました。

では今、神はどこに居られるのか……

イエスがヨルダン川で、洗礼者ヨハネ
 から洗礼を受けられたとき、イエスが、
 ヨハネの前に、その洗礼を受けるため
 に並ぶ大勢の人たちの列の中に一緒に
 並んだことが聖書には記録されていま
 す。その列の長さが、どれほどだった
 のか。おそらくそれは、とても長い人
 びとの列だったように思います。そし
 て、その人びとの長く続く列は、彼ら
 を抑圧し、困難を強いる者たちからは、
 「神の救いから最も遠い、罪人の列」
 に見えなかったはずです。けれど、そ
 の「罪人」と侮蔑され、救いのない現
 実の中で傷む人びとの列の中に、キ
 リストと呼ばれたイエスが一緒に並ぶ
 のでした。

今、神とどこで出会えるのか……

砲弾飛び交う地で逃げ惑う人と共に、
 倒壊した建物の下で泣き叫ぶ子どもと
 共に、ベッドもない病院で診察を待つ
 人と共に、パンのないパン屋の前に立
 ち尽くす人と共に、大切な仲間を失
 って、哀しみの花を手向ける人と共に、
 隣国のゲートが開くことを待ち続ける
 人と共に、キリストは居られる……
 傷ついた彼らを守ること、それは、
 神の愛を守ることにほかならない。

今年のクリスマス、神の愛の顕現の
 地に、再び、神が顕現することを祈り
 求めます。そして、多くの人びとの
 痛みを共に負い、誰よりも傷ついた
 者としての救い主の聖誕を静かに厳
 粛に祝いたいと思います。